

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の3年目)

1. 研究課題

「見えるもの」や「見えないもの」に関わる東アジアの文物や芸術についての学際的な研究

An Interdisciplinary Study on East Asian Works of Arts and Culture Concerning the Visible and/or Invisible Entities

2. 研究代表者氏名

外村 中

Sotomura Ataru

3. 研究期間

2019年4月-2022年3月(3年目)

4. 研究目的

東アジアの文物や芸術を解釈する上での共通の基盤の形成をめざすために、その前提として、あるいは「見えるもの」なのかもしれないが、普通であればまずは「見えない(と思われる)もの」にまつわる理論や事象について、従来の分野の枠組をこえて国際的にかつ学際的に探求することが、本研究の主な目的である。中でも仏身や道をめぐる議論は特に有効な指針を与えるものであるから、重点的にとりあげる。そして、様々な分野の研究者が一堂に会し、外来あるいは固有を問わず東アジアにおける多種多様な理論や思想から読み取られる共通点や相違点などを確認しながら、理論と作品との間に認められる矛盾点にも注意を払いつつ、上記の探求と関連する具体的な事例(特定の芸術作品など)を選定し、その文化史上における位置づけをおこない、実地に即した解釈のモデルをしめす。対象とする作品は、考古遺物から彫刻絵画、建築庭園、芸能音楽などにまで及ぶ予定である。

We carry out international and interdisciplinary research beyond the framework of the conventional academic fields, as a preparation for establishing a common basis to the understanding of works of arts and culture of East Asia.

Researchers from various fields come together to explore theories and works concerning the visible and/or invisible entities, which are supposed to be invisible to ordinary people. Since, we think, discussions on Buddhist and Daoist theories give a particularly effective guideline, we lay special emphasis on them. We not only confirm common and different points explained in a variety of theories and thoughts, no matter whether they may be indigenous or not, but

also pay careful attention to contradictions, which may be recognized between theories and works. We select concrete examples (specific works of art etc) and position them in East Asian cultural history so as to show practical models of interpretation. The works, which we investigate, range from archaeological relics to sculptures, paintings, gardens, architecture, music, performing arts, etc.

5. 本年度の研究実施状況

最終年度は四回の研究会（6月・9月・12月・3月）を実施した。班長は資料蒐集が必要なため毎回来日したが、コロナ禍で二週間の待機期間を確保せねばならず、不足した滞在費を負担せざるを得なかった。研究会は班長と副班長が所内共同研究室で運営にあたり、オンラインを基調としつつも、一部希望者が対面参加するハイブリッド形式で行った。6月の第一回は、2020年3月に予定されていたがコロナ禍で延期となった、『般若経』『維摩経』『大智度論』と関連作品」の回を改めて開催した。連続する二日間に一日あたり二本、計四本の研究発表を行い、最初の一本を班長、他三本を班員が担当した。第二回以降は一日のみの開催とし、各回とも二～四名が、これまでにカバーできなかった領域に関する各論の報告を行った。3月の最終回には、班長による総括と展望も行われた。三年間の発表全件への言及がなされ、個々の学術的意義を再確認して班員で共有することができた。

6. 本年度の研究実施内容

2021-06-05 『般若経』『維摩経』『大智度論』と関連作品 『道行般若経』が説く「見える」ものや「見えない」もの：般若波羅蜜（すなわち大乘）とはブッダの「見えない」母である 発表者 外村 中 ヴェルツブルク大学 弥勒の図像典拠の変遷に関する一考察 — 敦煌莫高窟を中心に— 発表者 折山 桂子 九州国立博物館

2021-06-06 『般若経』『維摩経』『大智度論』と関連作品 幽霊能における〈幻〉：金剛般若経・維摩経の思想と足利義持政権期における能の変質 発表者 重田 みち 京都芸術大学 中国北朝石窟の維摩・文殊図像 発表者 向井 佑介

2021-09-25 各論 佛身論に説かれる「見える」佛と「見えない」佛 — 法身解釈を中心に — 発表者 魏 藝 龍谷大学 雲岡石窟にあらわされた楽器について 発表者 大平 理紗 京都府立大学 神宝より見える、見えない日本の神々の姿 発表者 清水 健 東京国立博物館

2021-12-11 各論 『金光明経』が説く「見える」ものや「見えない」もの：〈「見える」靈鷲山のシャカ〉から〈「見えない」もので、廣大無限なる、法身のブッダ〉へ 発表者 外村 中 ヴェルツブルク大学 中国の書斎図から見えない古代を見るための初歩的考察 発表者 呉 孟晋

2022-03-26 各論 『楞伽経』が説く「見える」ものや「見えない」もの：〈「真我」〉は

「常道」であり、〈初期状態の「阿頼耶識」〉は「一なる」ものである 発表者 外村 中
ヴェルツブルク大学 雲岡石窟の供養者像とその意義 発表者 黄 盼 中国社会科学院 仏
像の出現時期について 発表者 内記 理 京都大学 太極殿と大極殿をめぐる幾つかの文学
作品を読む 発表者 古勝 隆一 京都大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

稲本 泰生、岡村 秀典、船山 徹、安岡 孝一、古勝 隆一、倉本 尚徳、呉 孟晋、
向井 佑介、高井 たかね、福谷 彬

学内

内記 理(京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター)

学外

外村 中(ヴェルツブルク大学漢学系)、大西 磨希子(佛教大学仏教学部)、大原 嘉豊
(京都国立博物館)、大平 理紗(京都府立大学大学院文学研究科)、折山 桂子(九州国立
博物館)、魏 藝(龍谷大学大学院文学研究科)、黄 盼(中国社会科学院考古研究所)、齋
藤 龍一(大阪市立美術館)、重田 みち(京都芸術大学)、清水 健(東京国立博物館)、高
橋 早紀子(愛知学院大学文学部)、瀧 朝子(大和文華館学芸部)、田中 健一(文化庁文
化財第一課)、塚本 明日香(岐阜大学地域協学センター)、中西 俊英(京都女子大学文学
部)、中安 真理(同志社大学文化情報学部)、西谷 功(泉涌寺宝物館心照殿)、増記 隆
介(東京大学大学院人文社会系研究科)、森下 章司(大手前大学総合文化学部)、横手 裕
(東京大学大学院人文社会系研究科)、マリア・カルロッタ・アヴァンツィ(秋田県立大
学・システム科学技術学部)、パトリシア・フィスター(国際日本文化研究センター)、シ
ビル・ギルモンド(ヴェルツブルク大学漢学系)、ベッティータ・ゲーシュ(関西大学)、リ
サ・コチンスキー(南カリフォルニア大学)、ヒラリー・ピーダセン(同志社大学文学部)、
マリア・トドロワ・ペトコヴァ(叡啓大学・ソーシャルシステムデザイン学部)、マリサ・
リンネ(京都国立博物館学芸部)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

	機関数 (必須)	受入人数				延べ人数					
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	2	11		2	1		38		5	1	
		(1)					(4)				
国立大学	3	3		1			8		5		
		(1)		(1)			(5)		(5)		
公立大学	3	3	2	2	1	1	14	9	9	5	5
		(3)	(2)	(2)	(1)	(1)	(14)	(9)	(9)	(5)	(5)
私立大学	8	9	3	1	1	1	26	5	9	9	5
		(7)	(3)	(1)	(1)	(1)	(23)	(5)	(9)	(9)	(5)
大学共同利用機関法人	1	1	1				1	1			
		(1)	(1)				(1)	(1)			
独立行政法人等公的研究機関	6	6	1	1	1		19	3	5	5	
		(2)	(1)	(1)	(1)		(8)	(3)	(5)	(5)	
民間機関	2	2					9				
		(1)					(4)				
外国機関	3	4	3	1	1		14	9	5	5	
		(3)	(3)	(1)	(1)		(9)	(9)	(5)	(5)	
その他 ※											
計	28	39	10	8	5	2	129	27	38	25	10
		(19)	(10)	(6)	(4)	(2)	(68)	(27)	(33)	(24)	(10)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

なし

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

なし

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

2022年度は、過去三年間の成果をとりまとめた、二十篇程度からなる論集の公刊にむけ、編集作業にあたる。年度前半は各発表者による論考の執筆期間とし、日本学術振興会(JSPS)の出版助成(研究成果公開促進費)に応募した上で、2023年度中の論集刊行をめざす。また関連企画として8月26・27日の両日、ドイツ研究振興協会(DFG)とJSPSの

助成を得て、日独二国間学術交流セミナー『美術史学・考古学から見た伝統東アジアにおける「見えない」ものの変容』を、班長が所属するドイツ・ヴュルツブルク大学で開催する。同セミナーでは当班所属メンバーの若手・中堅研究者7名が研究発表し、これと同数のドイツ在住研究者と対論を行って、伝統東アジアの芸術を解釈するための共通基盤の形成をめざす。コロナ禍のため当初予定の2021年度は開催できなかったが、将来を担う研究者のネットワーク構築には対面開催が不可欠との認識から、翌年度への延期申請が認められた。準備は万端であり、すでに全員が発表要旨を提出し、翻訳作業も完了している。